

今年で67回を数える伝統ある大会の意義について、協賛企業として大会を長年支援し続けている日本コカ・コーラのティム・ブレット社長と写真左と、1985年の第37回大会で2位となり、大学生時代にも日本学生協会基金のスタッフとして携わった有村治子・前女性活躍相（自民党参院議員）と写真右とに語り合ってもらった。

日本コカ・コーラ社長 ティム・ブレット氏

×

前女性活躍相・参院議員 有村治子氏

大会の意義 相互理解・平和に貢献

日本で育ってきたと述べ、大会と自社の歴史を重ね合わせた。また、大会が有馬龍夫・元ドイツ大使（1949年の第1回大会で2位）や有村氏を輩出したことに触れ、「過去の大会入賞者のその後の活躍が、大会成功の尺度」と指摘した。有村氏は、大会運営に携わった思い出を振り返り、「高円宮ご夫妻を始め、コカ・コーラ社など、第一線で仕事をしている人たちと



付き合う中で人格が形成されたことは貴重な経験になった」と語った。

また、2020年の東京五輪・パラリンピックの話題に及び、有村氏は同社の取り組みに「英語弁論大会やオリンピックの スポンサーになるにはコストもかかる。多額の支援を続けていることに敬意を表する」と賛辞を送った。ブレット氏は「この大会とオリンピックには、若者の相互理

解や平和につながるという部分で共通点がある」と述べた。

大会の今後について、有村氏は「伝えたい内容をどれだけ伝えられたかという観点からジャッジしてほしい」と話し、ブレット氏は「各方面からのフィードバックに耳を傾け、進化していったほしい」とメッセージを送った。

◇

対談は11月9日、東京・大手町の読売新聞東京本社ビルで行われました。全文はヨミウリ・オンラインに掲載しています。